

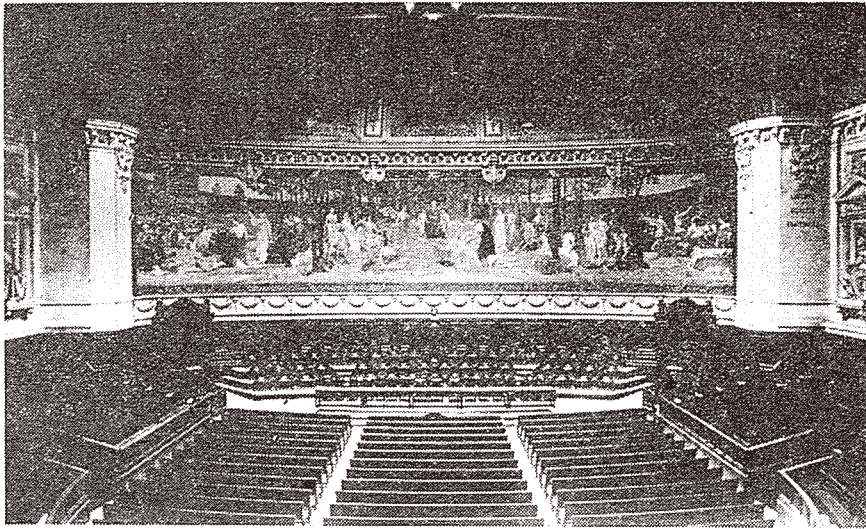
THE KANSAI UNIVERSITY BULLETIN

Osaka, June 15th, 1952. —No. 249

關西大學學報

第 2 4 9 號

昭和 2 7 年 6 月



ラ・ソルボンヌ大学の円形大講堂

關西大學學報局

ジョン・デューイについて

大、小 島 眞 二

(一)

英国のラッセル(一八七二年生れ)と同様に戦後欧米の思想界でその甚だしい高齡にも拘はず、依然として活潑に指導的な役割を果しつつあつた米国の哲学者ジョン・デューイ(John Dewey)は九十二才を以てこの六月一日に遂に逝去した。彼は一八五九年十月二十日ニュー・イングランドのバリンントンに生れ、その地方の自由主義的傳統の内に人となつた。彼は視野廣く、寛容で親切で、仕事に倦むことを知らざる最も勝れた高貴な人格の持主であつたと云はれてゐる。

デューイは決して單なる哲學者と呼ばれる人ではなかつた。教育は特に彼の関心の前面にあり、アメリカの教育に及ぼせる影響は徹底的であつた。一八九四年シカゴ大学の哲學の教授となり、ある進歩的な學校を建て、教育について多くの論文をものにした。それらは『學校と教育』(1899)に纏められているが、それは彼の多くの著書の内最も影響力のあつたものと考へられてゐる。それ以來彼の生涯、殆ど哲學と同様に多くの教育に関する著書、論文を出した。一九〇五年以後長くコロンビア大学の哲學と教育學の教授であり、ジェームス(1893—1910)亡き後 Pragmatism 實用主義の代表者として、その説の擁護と發展に盡した。社会的政治的問題は又彼の思想の大なる部分を占めた。ロシアと支那へ二度訪れ、我國にも來朝して東大

で講義をしたことがある。

デューイはジェームスの如く哲學の研究に於て心理學的生物學的事実に影響された。彼は知識をその具體的な母体即ち個人的社會的進歩に於て捉えた。そして生物體と社會を相互に調節(adjustment)させ、かくて一般に自然と調節させながら知識—思惟を器具或は道具(Instrument)と見做した。ここに彼の道具主義(Instrumentalism)の立場の出発点がある。

然しながらデューイはラッセルやコンガー其他によりて指摘されてゐる如くヘーゲル主義者として發足した。従つてプラグマティズムは觀念論の一つの所産だと考へられる。早い頃徹底的にヘーゲルの思想の感化を受け、それが彼の認識論と哲學的方法を決定した。かようにしてデューイの代表する現代のプラグマティズムを理解しなければならぬと云はれる。ところがこの影響についてあるアメリカの學者も云つてゐる如くプラグマティズムも余り注意してゐないし、デューイ自身忘れてしまつてゐるらしいし、又他乙の學界でもこれについて余り氣をつけていないようである。然しデューイはヘーゲル主義を社會的問題の面では妥當でないと思つたのは當然であつた。

さて絶対論的合理主義と解されるヘーゲルの哲學體

(二)

第二四九号 目 次

ジョン・デューイについて……大小島眞二(一)

学 内 報……………(二)

田形講堂開堂式舉行——定例評議員會開催——就職委員會開催——學會出張——人事異動

校 友……………(三)

友粹會開催——北河内支部結成——大阪支部・東京支部・神戸支部總會開催

海外彙報……………T・M・生(六)

山上憶良と貧窮問答……………吉永 登(八)

学 生……………(一〇)

徒然草と民法……………明石 三郎(三)

CIEより寄贈圖書……………(四)

編集後記

系が如何にして極端に經驗的であらゆる種類の合理主義に批判的であるデューイの如き理論に變えられ得たか。周知の如くヘーゲルは辯証法的論理を樹立した。それは通常の論理學が抽象的で單俗で且非記述的であり、そのなす定義は單に唯名的、言語的であるに對して具體的であり、それは思惟するものに事物の實の本体に徹せしめ、實の定義に達せしめ、又その眞理に於て絶対的で世界に關して記述的である。この具體的論

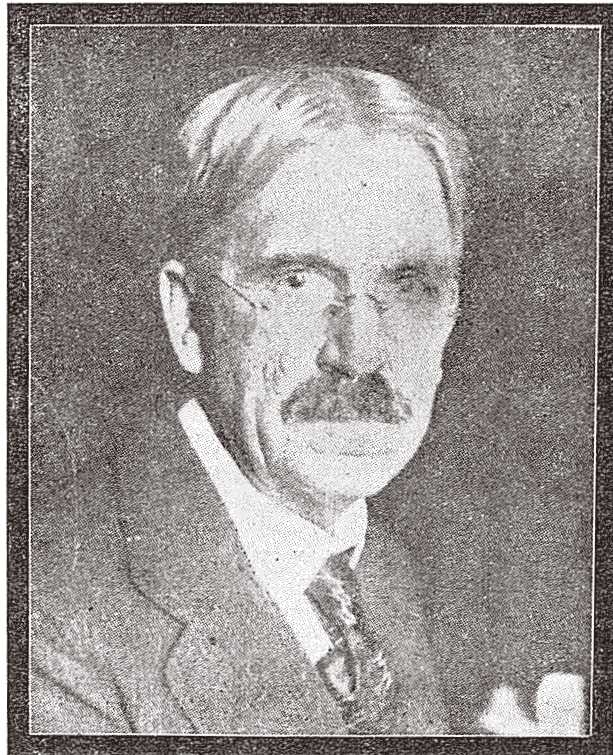
理の使用はヘーゲルによれば哲學的或は形而上學的の學問として、科學者によりて創りあげられた通常の經驗的科學よりも遙かに秀れたものにさせるのである。

デューイはかかるヘーゲルの圖式的なる形而上學的理論の偏重に隨せず、これを否定してヘーゲルから具體的理論の考へ方のみを受け入れた。それは形而上的でも抽象的でもなく又言語上の定義から構成されずして、思想の方法であり、それは精密なる處理に於いて世界についての眞にして普遍的なる推定を含有するものである。デューイによればこの具體的なる論理は科學に優越する形而上學的體系でなく、それは正に經驗的科學それ自体の方法である。それは歸納的論理であつて科學をして狭まい假説から廣い假説に向はせ多くの新しい事實を包含させるのである。

科學は單に一組の所與の事實からこれらのデータによつて支持され要求される假説に進むのでない。それは常に以前の假説から進むのであつて、その假説は新しいデータを理解する新しい假説に進行を強制する新しい事實によつて打破される。かくて知識は永久に新しい經驗に養はれそして新しい事實を吸収することによりてそれ自体を保ち再造する成長である。

かくて知識の具體的論理はこの知的新陳代謝或は成長のプロセスである。彼の説く論理或は科學的方法は正にこの成長の一般原理或は方法であり、それは經驗の最も深い且最も究極の性格である。

デューイは上述の如き主張から人間の知識と知識が記述する世界との關係の問題を承認するのを拒むようになつて、彼の好んで論ずる關係は以前と以後の知識の間の關係である。彼が見る現實は心と自然を發展させる知識それ自体のプロセスである。このプロセスは



故ジョン・デューイ氏

心に絶えず入つてくる新しい事實を吸収し消化する。彼にとつてこのことは、心に外的なる現實の實在論的概念を何等含んでゐないでそれから獨立してゐる。心に入つてくる新しい事實はそれ自体の權利で存在するものと思ふべきでない。何となればそれらはその事實としての性格を全く新旧の假説へのその關係から引出

すからである。

要するにデューイのプラグマティズムは後期カント學派の觀念論の一つの新しい經驗的訳書であると云はれる。それは心のプロセスと内容にのみ只實在或は現實を屬せしむるが如く見える。それは知識の外界、即ち知識でなく知識が記述する客體である實在への關係の實在論的論議を避ける。それは我々に知られたる古い事實、假説或は知識と知られたる新しい事實をのみ論議することを許容する。かくて人間の經驗内に我々を限定する。然しこのデューイの説く經驗とは社會的物理的生物的なる事物についての歴史的經驗で、現象學に於いて、フッサールの説くが如き直接なる理念的本質經驗ではない。かゝる点でフッサールと違つてデューイは自然主義的、且經濟主義的である。

さて上述の如き潜在的なる觀念論的論調は、デューイの社會的環境についての支配的なる関心に於いて稀薄となり曖昧となる。云ふ迄もなく人間の個體の最も重要な環境は社會である。かくて社會的再調節とは心と心と、更に生と生との相互的なる調節であることが示されるに至りて生物體と非生物體、即ち物理的自然との關係の調節に展開してゆく。その理論の開示は自然主義的、唯物論的用語に於いて進行しそして人間的生である肉體的進歩についての冷靜な科學的記述となつて現はれる。かくてある批評家の云へる如くプラグマティズムは大なる程度に、その哲學として表はされるものを除いて、人間の行動のみならず凡てに亘る

心理学であると解される。換言すれば自然と科学の哲学に移された生物学と心理学であると云はれる。

(四)

更にデューイはカント学派の思想の合理主義的前提を拒んで明白に科学的知性と道徳的直観とを一致させてゐる。科学が眞なる知識即ち眞理を表明すると思へばその主張は好ましい帰結に作用するものであり、當にそうあるべきものを明示するのである。かくて科学的判断と道徳的判断とは全く一致すべきである。この見解は十七世紀末の初期啓蒙思想の信仰に比較される。それは科学に道徳的指導を求め渾然と自然の法則と神の法則とを一致させ、科学の援助で地上の天国を建設せんと期待したのであり、更に宗教によつて道徳的に教へられた社会のユートピアの信仰を求めたのである。

道徳が科学的知性であるとするれば、科学は單に自然の記述に止まらず社会的改革のプログラムとなるべきである。デューイの説くプラグマティズムは従つて人間行動の各分野に於ける科学の最も充實した適用とその最も知的努力を求める社会的政治的運動となる。かくて人間の努力の各異なる分野へのプラグマティズムの理論の適用は彼をして時代の最上の師たらしめた。彼のなした指導の最初の成果は各分野の労働者に対して実際の労働を、ある特別な領域の人間知性の高貴なる修練として提示することによりて激励したものである。労働は尊貴なるものとせられ一層大なる知的努力へ刺激された。プラグマティズムの理論の第二の成果は労働者に創造的な努力を鼓舞し、彼等を單なる繰返しの習慣、職業的偏見、所屬の党派への狹量なる忠誠、及び各種の知的惰性から脱した。何となれば

実践は知性と一致し、知性は進歩的且創造的なものとして規定されるからである。

更に特にデューイは法律について、それは只道具であり絶えず刷新され、それによりて社会は、變化する経済と知的條件にそれ自体を再調節するとなし、かくて法律は人生に奉仕し、それを束縛するために存在しないとする法律家を彼は信頼した。かようにして一群の法律家をして経験的且プラグマティックな法律學へ方向を轉ぜしめた。

彼は又、政治家と市民に政治の組織は、政治を一般化し、これを用ひる社会的現狀以上に固定させてはならないと説き、プラグマティズムを政治的に急進的な信仰となした。次に教育に於てデューイは教師に向つて警告して形式的訓育に反対し、生徒の生得の諸能力を日常生活の現狀に即して、生徒に備つた独自の仕方て鍛練することによつて伸展させる進歩的教育方法を主張した。其他芸術、宗教に於いてその新しい進歩的な社会的機能に應ずる人間生活の改造を鼓吹し、かくて彼にありては一般に科学と社会は、人間生活の余りにも特殊化した部門と体制を、一般社会的責任性の承認の許に、相互的制衡と再調節に持ち來たらしめることによりて、人間生活を再創造する改革的プログラムの標語となつてゐると解される。これと連関して廣義の教育學は、凡ての哲學の問題が人生問題としての技術的概念別として差單に捉えらるべきでないその地盤となる。かゝる意味で哲學は云はば一般教育學說として妥當すると規定される。

(五)

ラッセルが西洋哲學史(1938)のデューイの項で、デューイの人となりを褒めて敬意を表し、デューイの

意見の多くのものに殆ど完全に同意するが、只残念なことには彼の最も顯著なる哲學上の學說、即ち論理の基本的概念及び知識の理論としての眞理の代りに、探究(inquiry)を置いたことに反対せざるを得ないと云つてゐる。デューイは「探究」を論理の本質として眞理或は知識としてゐない。そして「探究」を定義して、それは元の情況の要素を「統一化した全一」(a unified whole)に移行するために、その構成的特質と關係に於いて、決定的なるものへの不定なる情況の制限され方向づけられた變形であるとし、尙附加して探究とは客觀的な主觀事項の客觀的な變形に関するものであるとしてゐる。これに対してラッセルはそれは世界を一層有機的なものにせしむべき試論の一部分であることは明かであるとし、又「統一された全一」は探究の成果であるべきだとして、ラッセルは有機的であることについてのデューイの愛好は部分的には生物学に、部分的には容易に消えないヘーゲル主義の影響だと云つてゐる。ラッセルの如き數學と精密科学の基礎の上に樹てられたる「中性的一元論」をとる、立場を異にする側からの批判として已むを得ないと思える。

更に又ラッセルはサンタヤナのデューイに関する批判をとりあげて引用して、それが彼のみの見解でないことを力説してゐる。それは「現今の科学と倫理學に於いて、凡ての實體的、實在的なものを何か相對的移行的なものへ、それと同様に個人的なものを社會的機能へ解消する滲透的準ヘーゲルの傾向がある」然るにデューイの哲學は知識を道具として見る一種の力の哲學の立場であり、それは人間の共同社會の結集力と技術力が重視され、自然を支配し、人間が殆ど

學 內 報

円形講堂開堂披露會舉行

わが国に余り例を見ない講堂として鋭意建築中であつた円形講堂（アンフィシアター：Amphitheatre）は、茲々その竣工を見、開堂披露並びに記念講演會が五月三十日午後三時より千里山学舎の新築講堂に於て來賓、教授ら多数出席の下に開催された。

先ず宮島理事長、岡野学長の挨拶に次いで約一時間にわたり末永雅雄教授より最近本学と大阪府教育委員会共同で行われた大阪府南河内郡国分町円形北玉手山古墳発掘に関する講演あり、同四時半閉會した。會後一同別室に展示された古墳調査の記録写真十数葉及び出土品數点を見学して散解した。

宮島理事長挨拶要旨

大学院研究室等建設の一環として本円形講堂がこゝに完成した。尙多々改善を要する点はあるが、今後有意義に各位の御活用を願いたい。昭和九年、當時の本学予科が烏有に帰して以來、永らく草の生ひ茂るがまゝであつたが、今日その跡にかゝる大学院研究室を始めこの講堂が建てられた事は眞に慶びに堪えない所であると共に、この建築設計指導に異常な

る熱意を寄せられた村野藤吾・森忠一兩氏にあつく感謝の意を表する。

かつて私はパリのソルボンヌ大学の円形大講堂を見聞し、そこにある數多くの彫刻繪畫を始め、それら重厚なる雰囲気より受ける印象に、かゝる建物わが国の大学に於いても必要であると痛感せしめられた次第である。今茲に御披露する講堂は、勿論パリのその如く規模設備等論ずるに足らないし、徒らにそれを眞似ようとするものではない。しかし少くとも將來に於いて一見してラ・ソルボンヌを直感する位のものとしたいという私のひそかなる願ひは、今日この中に足を踏入れた時の氣持が、かの地に於いて受けた印象と相通するものを感じて独りよるこびにひたつてゐる。

しかし乍ら、單にこれを以て満足するものではない。將來に於いて更に大なる發展を爲すべきスターティング・ポイントにあつて本講堂の竣工がその第一歩となるべく努力あらん事を望む。

定例評議員會開催

五月二十九日午後三時より、天六学舎に於いて定例評議員會を開催、昭和二十六年年度入出決算を承認可決した。

就職委員會開催

六月十一日（水）午後三時半より天六学舎に於て就職委員會を開催した

學 會 出 張

◇佐伯三郎教授は四月十八日和歌山大学で開催の日本商業学会関西大会に出席

◇佐伯三郎・河村宜介兩教授は五月十六日・十七日神戸大学で開催された日本商業学会全国大会に出席

◇荒井政治助手は五月二十三日・二十四日慶応義塾大学で行われた日本西洋史学会に出席

◇田中照教授は五月二十七日大津市で開催された関西倫理学会に出席

◇安田信一教授は五月三十一日より六月三日迄、東洋経済新報社主催の金融学会昭和二十七年上期大会に出席

◇加藤由次郎教授は六月七日・八日兩日、奈良女子大学で開催された関西哲学会に出席

◇中井駿二・森川太郎兩教授は六月五日より八日迄早稲田大学で開催の日本フランス文学会春季總會に出席

◇進藤浩二郎教授は六月七日及び八日名古屋大学で開催の日本英文学会大会に出席

◇河村宜介・廣瀬拾三兩教授は五月三十一日・六月一日の兩日和歌山大学学芸学部に於ける一般教育研究会に出席

人 事 異 動

田 辺 純 夫

西 原 寛 一

昭和二十七年年度本学講師を委嘱する
右昭和二十七年四月一日付（各通）

清 水 剛

昭和二十七年年度本学講師を委嘱する
右昭和二十七年四月十五日付

山 本 栄 一 郎

本大学助教授に任し文学部勤務を命ずる
教授 植 田 重 正

右昭和二十七年五月十五日付各通

中 川 與 之 助

昭和二十七年年度本学講師を委嘱する
右昭和二十七年六月一日附

校 友

友 梓 會 例 會

昭和十三年度専門部二部商業学科卒業生を以て組織する友梓會は卒業式當時の神戸学長を迎えて結成以來、篤志家、世話係の運営よろしきを得て活潑なる活動を爲し戰時中一時中断したるも旺盛なる友情は之を再建せしめ年二回の定期例会に於て往時の恩師を招き其他隨時委員會開催する等、卒業以來十余年を経過せる現在猶、常に來會、密接なる連絡を保つ會員三十余名を有してゐるが、去る四月廿九日新緑の大和に於て例会開催したる処、雨天の爲折角の催しも効果が薄れた

が大阪に於て金鐘校長の奈良文化に付ての講話を聞きたる後大佛殿前「三山」に於て懇親会を開催した。次回例会は八月頃の予定、世話係は大関秀夫、岡田克己、並川治郎の三君と決定された。因みに本会事務所は左記の通りであるから未連絡者は連絡され度い。

事務所 大阪市東区京橋三ノ一五

森田商店内

尚当日出席者左の通り。

森田文一郎、安田隆、牧村恵司、日野林泰治、並川治郎、安藤博重、橋谷未吉、西澤隆、森本勇、阪本正六、和田秀一、越江城夫（順不同）

北河内支部結成準備會

五月十二日支部結成の機運の擡頭した北河内に在住する校友は、寝屋川市財團法人豊野保育園に於いて大学側春原理事松原教授を迎えて充足の会合を開き、会則、役員其の他の事項を打合わせ六月の總會にその承認を得る事になった。出席者は次の通り。（順不同）

高橋重夫、下野英三郎、青田昌弘、久保田博之、石田輝雄、廣延照、北村正治、藤井昭三、藤木榮治、山下勇次、門上敬夫、石原義三、荒川虎一郎
更に支部結成を記念して、同日午後豊崎保育園並びに古川橋青年会館の二会場に於いて、講和記念講演会を開催、聴衆に多大の感銘を興え盛況裡に会を終えた。講演者左の通り。

特別講演、齋藤京大教授、松原開大教授、講師、春原源太郎（大理事）、荒川虎一郎（寝屋川市會議員）、高橋重夫（府會議員）、島村保穂（元府會議員）、門上敬夫（大阪農論研究所長）、田口義行

（大佛殿）、高橋重人（雄辯會幹事長）、播磨莊一郎、藤川雅彦、西川健雄（雄辯會）、阪橋路

大阪支部春季總會

大阪支部春季總會は五月十七日（土）午後四時より千里山学舎に於て開催。これに先立ち一同午後二時大学外苑に参集小憩の後、苑内を三々五々散策、山道傳いに大学ホール前に集合、記念撮影の後新築の大学ホール及び研究室、更に、他に多く比を見ない円形講堂を參觀、その威容に讃嘆す。總會は、会計報告及び会



大阪支部總會記念撮影

則改正の件共に全員の承認あつて閉会。會後、宴に入り、欲談盡くる所を知らず

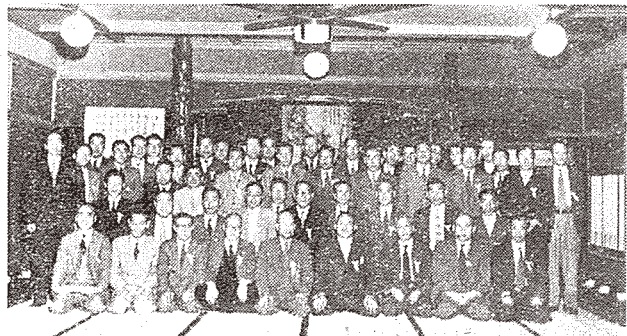
午後七時散解。当日出席者次の通り（順不同）

一本正光、馬場次郎、馬場弘道、春原源太郎、西本寛一、岡野智次郎、岡崎重光、大曾師則吉、大石雄一郎、大月伸、和田登二、笠置省三、金田茂就、阪本信雄、柏元孝治、神原敏氏、神吉等、鎌田嘉之、桂忠雄、橋田長次郎、吉村福蔵、殿林作太郎、田中一郎、中野平吉、中野俊雄、村居郁明、栗本義重、山根龍藏、八木万太郎、山本寅之助、安井謙吾、松井廣樹、福西新右衛門、福村敬雄、小林規、寺西武、阿部甚吉、阪合久治、喜多芳明、富島綱男、三島律夫、南清、富島秀夫、志野登治郎、平井三郎、關野馬（政務課）

東京支部會開催

五月二十一日午後五時より、大森海岸松茂本店に於いて岡野学長を迎えて校友四七名が参集。福田支部長の挨拶の後、岡野学長の祝辭並びに学内報告があり、議事に入り、会計報告、経過報告及び委員改選を行つた。その結果、福田支部長は再選、副支部長に香西政一、安田日出男、理事に山地仁、植田八郎、松野幸吉、有田春雄、佐藤芳太郎、浅井明の各氏、顧問に武田宣英、板橋菊松、中山幸二郎、平岡啓道、住谷卓雄、岸本忠雄の各氏が選ばれた。後懇親会を開き和氣霽々の内に学歌の齊唱、母校の発展と校友の健闘を祈り万歳三唱の後閉会。出席者次の通り。（順不同）

學長、岡野智次郎、板橋菊松、飯川琢也、井口一、畑孝二、西垣友夫、大関親太郎、大谷恭一、大原正夫、大島幸太郎、奥田秀行、栗川英希、片山有終美、川越武明、金子隆太郎、甲斐亀夫、竹若隆三、田中露藏、田中敬雄、台原輝男、筒井淳造、中山幸市、中尾秀樹、中村簡吉、植田八郎、平岡啓道、山地仁、安田日出男、山口榮治郎、正



東京支部

神戸支部春季總會

五月二十四日（土）午後三時より山手北京樓に於て神戸支部春季總會が開催せられた。大学側より岡野学長、安井校友課長が出席、先づ副支部長向井裕亮氏開会の辭に始まり支部長角田好太郎氏の挨拶があり、次いで岡野学長より最近の大学内に於ける現況報告並びに運営方針に就て微細に述べられ安井校友課長より所



海外彙報

今昔隨想

一、ボア・サクレ

この度落成した大学院研究室に隣接する半円講堂の開堂式の席上、私はその挨拶の中でこの講堂は——相距る甚だ遠いものではあるが——ラ・ソルボンヌ大学の円形大講堂(Le grand amphithéâtre)にあやかるつもりで出来たものであることを述べ將來は一目見ればこれは正しくラ・ソルボンヌのそれを作りたいと結んだ。これは夢の様な話であるが何年後か何十年後の実現を期し世界でも有名な前記円形大講堂のことをここに紹介する(本誌第二三四号八頁参照)。

一二五三年神学を教授する爲にルイ九世王室付説教僧ロベール・ド・ソルボン(Robert de Sorbon 1201—1274)が一小学舎を建てたのがそもそもの濫觴であつて一六三五年より一六四二年に亘りルイ十三世の宰相でフランス文化中興の祖と称せられるリシュリュー大僧正によつて拡張改善され更に一八八五年より一九〇一年に至る十六年間を費し建築技師ネノ(Ménot)のプランに依つて建設されたものが現在の新ソルボンヌ(La nouvelle Sor-

bonne)である。実に壯大な構装で其の面積二万平方メートルに及び本館西入口を入るやそこに円形大講堂がある。吾人が飽としたいのには即ちこれである。

この大講堂は幅四十米、奥行三十五米、容積一万三千六百立方米、演壇の前後左右及び梯敷を通じて約三千人——パリの大オペラが二千二百人——を入れることが出来る、採光管轄には専門家が少なからず思案、苦心したと云う、向つて右側にリシュリユー、パスカール、ロラン、左側にリシュリユート向合つてソルボン(ラ・ソルボンヌの二創立者)、デカルト、ラヴオアジエの座像が安置してある、是等の像について面白い話がある、即ち立像にすべきが座像にすべきかがやましい問題となつたが、聴衆がラク／＼と椅子にかけて居るのに不滅の功績を残した偉人を立たせておくのは相すまぬというネノの意見が遂に用いられたとのことである。

上述の如くこの大講堂は美術、工芸及び科学の粹を集めたものであるが就中正面を飾る學問を象徴した豪華な壁画『聖林』(Le Bois sacré)はその白眉であるピエリス・ド・シャヴァンヌ(Pierre Puvis de Chavannes 1824—1898)の筆になる長さ二十五米六〇高さ四米五〇の労作である。最初これを置く依頼を受けたシャヴァンヌは、諸否に苦しんだ末、聴衆が長い話を聞

く間見飽きのせぬような繪をものすることは不可能に近いとして断る決心をしたが一友の勧告により思い直して更に思案を練り、遂に考案を得て一八八六年下図に取りかかり一八八九年に完成した、今簡單にその寓意を記して見よう。

神聖な森の空地の真中に大理石の上に座する女性にはラ・ソルボンヌ大学を象徴する、中央の後方に座し峻厳な面もちで手を組んで居るのは、諸學説の論争に干渉することなく唯平正に全体を見守る使命をもつて居るため、即ち大学に於ける學問研究の自由を保障するの意である。

左右に勝利の表章を持つて親しげに彼女に寄りかかる二人の使者は、功勞ある生者死者に之を授けんとして居る。中央前方の岩から清水が滾々と湧き出て居る、若者は勿論八十の手習で老人も來りこれを貪り飲む、教育は汲めどつきぬ智の泉、老いも若きも共にこれを求める。向つて左に立つて立派なデウスチニアで得々然と辯じて居るのは雄辯を現わす。この雄辯を嘆賞裡に聞き入る左右数人の女性はその容姿により各々抒情詩、史詩、悲劇、諷刺、寓話、喜劇を表現する。

哲学では唯物論と唯心論との二大思想が並び行われ、これをめぐつて厭世と疑惑とが往來するとせられる、そこでテーマとして死の問題を中心に是等二大思想の争いが起る、そこに全哲学

が集約されると考えた作者は先ず厭世を現わすに深刻な顔つきで頭蓋骨を手にしてこれを凝視し悲痛な態度で死はすべての終りであることを説明して居る一女性を以つて、次に唯物論は身に豪奢な衣服をまとい顔に笑みを湛え、手をあげて地上の喜びと絶え間なき物の移り変りに憂身をやつす一人の美しい若い娘を以て現わし、又唯心論を現わすに、身に僧衣をまとい向上心に燃えつつ理想に向つて進む一女性を以て最後に疑惑は、聴き而して考え直す一老女を以て現わした。

過去の遺物が提供する文献に依つて過去の人類社会を究め現代のそれを考へることが歴史であるとする、往時の記録を蔽ふ木の枝を子供が取除きその記録を書きなさんとする一女性が歴史を現わす、尚古壁を取りのけて居る数人の労働者は苦役を止めて歴史の云うことに耳を傾ける、傍らの腕白小僧はそんなことには一向おかまいなく古鉄兜を頭にのせてたわむれている。端に腰打ちかけて居る老人は博學を現わす。(以下中央より向つて右)自然科学は数種に分れる、地質学及海洋学は二人の女性によつて現わされる、身に軽羅をまとい全身が透視される、これは自然の美を賞するの意、一人は海を現わし額に珊瑚の王冠を戴き手に法螺貝を持つ、陸を現わす他の一人は宝石で飾られ手に水晶を持つ。化石した貝

殻のついた岩の上に座せる頭丈な老婆は鉱物学を現わす。後ろ向きになり膝の上に花束をのせて居る女性は植物学である。医学は二人の子供によつて現わされる、一人はメスを以て蛸腸を捕えて研究せんとし、他の一人は細菌培養のフラスコをもつて実験して居る。物理学は作者によれば、エジプト人がエジプト上代文化の化身として崇める女神イヂス(Isis)にもたとえられることで高い台にのせてあるのは女神即ち物理学である、五人の若者が斯学の研究に身を捧げること誓ひ、研究の成果たる電気燈火を供えて居る。最後は数学である、木蔭で三人が幾何の問題を解かんと夢中になつて居る。ラ・ソルボンヌを連想しつつこの話を止める。

二、アンドレ・ジイドとポール・クロードル

数日前たま／＼パリから近來種に見る面白い一本を入手した、ジイドとクロードルとが取交した書翰の蒐録(Paul Claudel et André Gide. Correspondance. Gallimard, 1949)である。かかる書翰集が本人の存命中に公にされたのは稀有なことである、一方ジイドは八十二才で昨年亡くなつたが、他方クロードルは八十四才でなお墨鏢、一年の大部分をフランス東南部一小邑ブラングの別墅に過しそこで大に書きその作品は殊に近年パリで盛に上演

されている。是等二人にポール・ヴァレリー(Paul Valéry 1891-1945)を加えて現代フランス文壇に於ける三巨星と云われて居る、私は文学は専門ではないが幸ひこれら三人共に相当縁故が深い、ヴァレリーとは滞佛中少し交遊があつた位であるがクロードル(Paul Claudel 1868)とは彼が一九二二年大使として日本に來るやいなや昵懇になり三十有余年の今日に至るまで交遊を續けて居る。私が佛文で『文樂人形芝居』(Théâtre Japonais de Poupées 1881)の一書を書いたのも彼故である、即ち彼から「文樂のような日本の誇るべき古典芸術について君は何も知りませんね」といわれ感憤しての産物である。彼は曾ては本學を訪れ又最近にも本學の學生にメッセージを送つて來たこと等については度々本誌に紹介したところである(本誌第二号及び第二四四号参照)。

アンドレ・ジイド(André Gide 1869-1951)は私の恩師シャルル・ジイドの甥にあたる即ちアンドレはシャルルの兄ポール(パリ法科大学ローマ法の教授であつたが早世した)の子である、先生からよくアンドレの話の聞かされたが、あまりよくは云わなかつた。親戚付き合いなどは全然しなかつたやうである。

アンドレは非常な偏人でもつかしやオリジナルと云うやつである、私が先生に一度紹介して下さいと云つたら先生は曰く「私は君を彼に紹介することを欲しない、何故ならば彼は誰彼かまわず氣に障るようなことを平氣で云う男だからどうせ君にも何か云うであらう、そして君は怒るであらうから」と、其後再三紹介を頼んだ揚句先生は云つた「いつも云う通り私は紹介しない然し君がそんなに彼に逢いたければ親戚の女でアンドレの家に始終出入りして居るものがあるからこんど彼女が來たら君をアンドレの家に同行するやう頼んであげましょう、しかし君が逢つて腹が立つような目にあつても私は責任は負いませんよ」と、アンドレは勿論オリジナルであつたに違いないが私の先生も亦彼に劣らずオリジナルでないことはなかつた、然し私は學徳に於て先生を非常に偉い人として永久に敬慕する(拙著: Souvenirs sur Charles Gide. Recueil Sirey, 1984参照)、アンドレも高慢であつたといへば伯父のシャルルには一目置くといふ書き又彼は前記コレスボンダンスの中でポール・クロードルにはその廣さ深さに於て健康に於て才に於て精力に於て子供に於いて信仰に於て私はとてもかなわぬ、結局彼から一種の威圧を感じると書くなどやさしいところもある、尤もクロードルは偉大である。

尚二大家の書簡集は前にも云う通り近來私が読んだものうちで最も興味ある一本であるが遺憾ながら今はその内容をこゝには紹介することが出來ない。たゞ諸君の一読を勧めるに止める。(T・M・生)

山上憶良と貧窮問答

吉 永 登

日本文学史上、山上憶良ほど人間愛に徹した作品を残してゐる歌人は見当たらない。勿論、貧しい人、あはれな人を取り上げてこれを歌つてゐる歌人は探せばないこともない。古くは

家ならば妹が手まかむ草枕旅にこやせる

この旅人あはれ(万葉集卷三、四一五)

と歌つて行き倒れの旅人をあはれんだ聖徳太子などもその一人である。この歌が果して太子の作であるかどうかは詮索の余地もあらうが、兎に角憶良よりは遙かに古い時代の歌であることは否めない。又、憶良よりは歌人としては古い閑歴を持つてゐる柿本人麿にしても、香具山の麓で行き倒れてゐる死人を見ては

草枕旅の宿りに誰が夫か国忘れたる家待

たまくに(卷三、四二六)

といふ歌を手向けて居り、讃岐の国狭岑の島の死人を見てよんだ長歌もある。前者に附した詞書の「……悲^{かな}しみて作れる歌」にも人麿の人間愛が認められ、後の一節者

……浪の音の 繁き浜辺を 数妙の 枕となして
荒床に より臥す君が 家知らば 行きても告げ
む 妻知らば 来も問はましを 玉梓の 道だに
知らず おほほしく 待ちか戀ふらむ はしき妻
らは(卷二、三二一)

によつても彼の死者に対する同情の一通りでなかつ

たことが知られよう。

従つて、憶良がたとへ身分の低い大伴熊襲の死を悼んで、長文の序と、一首の長歌、五首の反歌といふ大作を追和の形式で作つて居つても、そしてそれらの作には次の二首の反歌

常知らぬ道の長路をくれくれといかにか

行かむ^糲米はなしに(卷五、八八八)

出でて行きし日を数へつつ今日今日と吾

を待たすらむ父母らはも(同、八九〇)

に見られるやうに、自らを死者の立場においての嘲笑があるにせよ、なほ太子や人麿よりも徹底した人間愛に立つものとは云へないやうに思はれる。

掬てそれでは、眞の愛とは？と云ふことになるのであるが、それは決して隣りに住む貧しい人に同情を寄せ、偶然道に出逢つた死人に涙をそぐだけではないのである。もともとさうした人々にすら同情を持ち得ない者は論外であるが、実はさうした人々に共通する貧困などと云ふ事象を取り上げて、これをするどく眺める時、そこから自ら生ずるものこそ眞の人間愛なのではあるまいか。この意味で憶良が貧窮問答の大作を残してゐることは注意すべきで、今煩をいとはないで其の全貌を紹介することにしよう。

風雜り 雨降る夜の 雨雜り 雪降る夜は 術も

なく 寒くしあれば 堅盤を 取りつつしるひ

糟湯酒 うちすすろひて しはぶかひ 鼻ひしび

しに しかとあらぬ 鬚かきなでて 吾をおきて

人はあらじと 誇ろへど 寒くしあれば 麻ふす

ま 引かかふり 布肩衣 ありのことごと 蕭そ

へども 寒き夜すらを 吾よりも 貧しき人の 父

母は 飢多寒からむ 妻子どもは 乞ひて泣くら

む この時は 如何にしつつか 汝が世は渡る

天地は 廣しといへど 吾がためは 狭くやなり

ぬる 日月は 明かしといへど 吾がためは 照

りやたまはぬ 人皆か 吾れのみやしかる わく

らはに 人とはあるを 人なみに 吾れもなれる

を 綿もなき 布肩衣の みるのごと わわけさ

がれる かがふのみ 肩に打かけ 伏臘の 曲臘

の内に ひた土に 藁解き敷きて 父母は 枕の

方に 妻子どもは 足の方に 囲みゐて 憂ひさ

まよひ かまどには 煙ふき立てず こしきには

蜘蛛の 集かきて 飯かしぐ ことも忘れて ぬえ

鳥の のどよみ居るに いとのきて 短きものを

端きると 云へるがごとく しもと取る 里長が

声は 寝やどまで 來たち呼ばひぬ かくばかり

すべなきものか 世の中の道(卷五、八九二)

世の中をうしやさしと思へども飛び立

ちかねつ鳥にしあらねば(同、八九三)

ところで、この歌が内容にふさはしい表現をとつてゐるかどうか、従つて文学的に高い位置を占めるものであるかを私は知らない。しかしここに取扱はれてゐる貧困は決して彼自身の身辺の具体的個人のものではないことだけは明らかであらう。問を発する作者——それすら恐らく憶良とはかなりの距離のあるもの

であることは云ふまでもないが——と、それに答へる更に貧しい人物——これこそ全く虚構になる人物であらう——と、この二人によつて歌はれてゐるものは正しく憶良の生きた時代の貧困な階層に属した人らに共通した苦痛に外ならないのである。

もとより虚構な誇張を意味するものではない。綴日本紀に見られる数多い農民の逃亡の記録や、これを防止しようとする政令の頒発など、何れもかうした苦しみ多い階層の存在を示してゐるのであつて、その意味で憶良の作は文学的真実を傳へるものと云へようか。

しかもなほ忘れることの出来ないのは、彼に

富人の家の子供の着る身なみ朽たし拾つ

らむ綿繻らはも(巻五、九〇〇)

の作のあることであらう。この歌は「老身重病年を経て辛苦す……」といふ詞書を持つ一連の一首である故に、或は病人ひがみであり、羨望とも見られよう。がそれはどこまでも短見といふべきで、憶良の作品全般を見渡す時、やはり当時存在した貧富の差の甚しさに對する彼なりのいきどほりとして耳を借すべきものと考へる。

かうした思想歌人とも云ふべき憶良の傳流が何故其の後の日本文学に跡を絶つに至つたのであらうか。惜しいことであり確かに考へるべき数々の問題を含んでゐるのであるが、今は触れない。ここで問題にしたいと思ふのは何故憶良がさうした歌人であり得たかと云ふことである。勿論、憶良の爲人によるものと云つてしまへば、答はすこぶる簡單で、又事実それに相違ないものである。が、彼の関歴の中、何か彼のかうした人間形成に寄與したものではないであらうか。かう考へる時、直ちに頭に浮ぶものは彼の渡唐してゐるとい

ふ事實であらう。文武天皇の慶雲二年、遣唐使粟田真人に隨行して彼の地に渡つたところ彼の教養に世界的視野を與へたものと云ふべきで、遣唐小録といふその地位から云つても政治的活躍などする余地もなく、事務処理の外は専ら読書三昧の生活を送つたであらうことは想像に難くない。それだけに本場の學問はどれだけ彼の視野を廣くしたことであらう。

今一つは、これは曾て本誌でも論じたこともあるのであるが、憶良が日本書紀の編纂に従つたといふことである。もとよりこれは單なる臆測にすぎないものであるが、しかも彼が少くとも書紀を読んでゐることは、その編纂になる類聚歌林に引用してゐることでも知られよう。兎に角、彼が最低限史書を読んだといふ事實は、どれほど彼のものの見方を深めたことであらうか。

渡唐により視野の空間的拡充、史書披閱により同じく視野の時間的拡充、思へば憶良ほど日本文学史上めづまれた者はなかつたといつてよい。従つて彼の晩年の現実生活がたとへ誇張なしに

すべもなく苦しくあれば出で走り去なな

と思など子等に障りぬ(巻五、八九九)

といふ歌に見られるものであつたとしても、矢張り私には羨しい存在であつたと思はれてならないのである。(文學部教授)

(三頁よ)

神として自己を考えるに至る。この力の過信と陶醉、自然及び宇宙への不遜冒瀆は現代の最大危険であり、社会的災厄の危険を増すものであるとラッセルが論じてゐるのは首肯させるあるものがあると思う。

デューイは彼の哲学を通じて現代のアメリカの文化の發展と形成についてはかり知れざる功勞のあつた巨

大なる存在であるが、明日のアメリカに對する意義としては一昨年九十才誕生日を迎えての記念論文集 J. D.: Philosopher of Science and Freedom. A Symposium. の批判的紹介を Journal of Philosophy に於いてなした H. A. Tarabee の言をかりると、デューイを正に彼等とは異なる「現代的古典」modern classic と見做してゐる若き哲學者のあるものの傾向に關して思ひあはされるのは、彼の後進者達に彼の精神に於いては完成してゐるが、今では左程羨やむにも足りない仕事、又彼等に対して遂行するために輪廓づけられた多様な仕事を彼の権能を以て残すことによりて、且又強い切実な諸論争点についてなした彼のソクラテス的主張の故に、彼は依然としてアメリカ國民の知的生活の内に永久に大きく浮ぶものである。(文學部教授)

(一九五二・六・一一)

- デューイの著書の重要なものと彼に關する文献
- Dewey, J., How We Think 1910.
 - " Democracy and Education 1916.
 - " Creative Intelligence 1917.
 - " The Quest for Certainty 1929.
 - " Reconstruction in Philosophy 1920.
 - " Experience and Nature 1925.
 - " Liberalism and Social Action 1935.
 - " Logic, The Theory of Inquiry 1938.
 - Dewey and Tufts, Ethics 1908.
 - Ratner, J., J. Dewey's Philosophy, Intelligence in the Modern World 1939.
 - Schilpp, ed., The Philosophy of Dewey 1939.
 - Hook, ed., J. D.: Philosophy of Science and Freedom 1950.
 - Russell, B., A History of Western Philosophy 1946.
 - Sellars, ed., Philosophy for the Future 1949.
 - 永野芳夫, デューイの哲学

学生



固めている。(カットはホツケーリーグ戦)

本学 18-0 神大
10-0 京大
11-0 和太
4-1 市大

◎軟式野球部 春秋二季常に優勝を遂
じていた当部は、今シーズン始めて優勝
を実現した、同大の一敗で惜くも完全優
勝を逃したとは云え、十戦九勝の輝かし
い成績であった。春季リーグ戦及び全国
大会選成績は次の通りである(前号記
載以後)

五月六日 本学2-1立命 日生
五月九日 3-0 種大 日生
五月十五日 4-1 神大 中モズ
五月十七日 1-0 関学 日生
五月十八日 7-3 関学 日生
五月二十日 本学5-1阪大 日生
五月二十一日 4-3 阪大 //

四月中旬より開始された体育各部の春
季戦は五月を最高潮として、大半のリ
グ戦、トーナメント戦を終了するが、例
年、弱体をかこつていた部が優秀な成績
を挙げ、或は不動の強味を發揮し連統制
覇を遂げた部があり、又意外の不振に下
位轉落する部など、豫想外に荒れた試合も
多かつた。

◎ホツケー部 連年春秋二季連統優勝
の輝かしい記録を残す当部は、本春も無
敵を誇り、他校に與えた得点は一点きり
と云う完勝を記録したばかりか、シーズ
ン中、名古屋に遠征、日本代表チーム全
東京をも破る豪勢であり、七月二十日
西宮で行われる東西対抗、今秋復活第一
回全日学生選手権にも絶対優勝の自信を

持つ、これにも優勝した。
五月二十八日より全国大会大阪豫選に
臨み、これにも優勝した。
第二回戦 本学10-1大田山 山本球場
準決勝戦 9-2 大田山
決勝戦 2-0 近畿大 //

加、六月五日兵庫代表、関学大、京滋代
表、同大紀和代表、和歌山大の四校のト
ーナメントによつて近畿代表が決せられ
たが、本学は同大と試合し、三壘手神戸
の二壘打も空しく、1対0で惜敗、全国
大会出場の希望を喪なつた。

続いて行われる、全近畿大学大会が六
月八日から、全近畿三十二大学の参加に
よつて舉行されるが、順当に行けば優勝
戦で再度、同大と顔を合せる筈であり、
リーグ戦以來戦績実力互角の好試合が豫
想せられ、当部にとつては、今度こそ負
られぬ試合であり、優勝を期している。

◎拳斗部 五月十六日より毎週金曜日
大阪アール特設リングに於いて関西五大
学リーグが開催されたが、圧倒的に強力
を誇る本学は、連勝、六月十三日最終戦
関学大に勝てば本春も完全優勝を遂げる
ことになる、試合成績は次の通り

本学 同大
○河 戸 フニア 松 本
○橋 本 フライ ×不戦勝
○山下 フライ ×上 中
○福 本 バンタム ×莊 野
○長谷川 バンタム KO ×櫻 井
×成 瀬 フェザー ○藤 原
×小 坂 フェザー ○馬 詰
×岡 部 ライト ○前 原
○西 尾 ウェルター KO ×塩谷

本学 立命

○河 戸 フニア ×前 田
○山下 フライ ×日 尾
○黒 川 フライ ×不戦勝
○長谷川 バンタム KO ×押 本
○高 島 バンタム ○山 元
○橋 本 フェザー ×金 本
○福 本 フェザー T.K.O. ×清水
○小 坂 ライト ×不 明
×岡 部 ウェルター ○青 山

第四週は近畿大と対戦、橋本以外は二軍
で戦つたが、七対二で完勝、殊に橋本、
福本両チャンピオンは無敵な強さを示
し、適確なパンチにストリートに無敵な
く、新人長谷川と伴にK・O勝を続けて
いる。関々戦は熱戦が期待される。

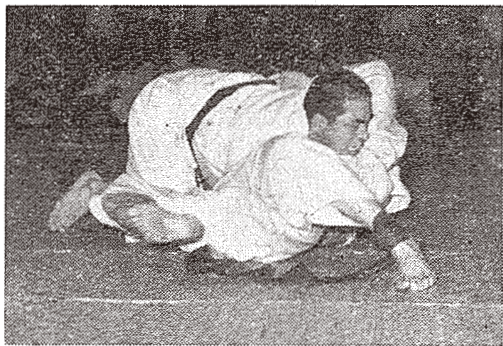
◎柔道部 第二回関西学生柔道大会
が、六月七日、八日の両日、大阪警察学
校道場で舉行されたが、第一日選手権に
は本学堀田が優勝戦まで勝残り、同大石
田に敗れ、第二位となつた、一瀬は二回
戦に同じく石田と顔を合ひ本大会白眉の
試合となり、一瀬の内股が決つたかに見
えたが今一息足らず敗れたのは惜しかつ
た、試合成績は次の通り
準々決勝 ○堀田 釣込腰 西井 龍谷大
準決勝 ○堀田 釣込腰 鏡原 香農大
決勝 勝 ×堀田 後 腰 石田 同志社

第二日大学対抗戦は、前年について本学の連覇するところとなつた。

本学 同大

○10堀田	釣込腰	×林
○10渡辺	体落	×位田
○10三浦	四方固	×安井
×林田	けき固	○森田
×原田	判定	8○山口
△野見山	分	△宮内
×一瀬	大内刈	10○石田
計30点		28点

技勝は十点、判定勝は八点であり、総合得点は二点の僅少差であつたが、特に先鋒堀田、新人渡辺、三浦、原田等の健闘は称讃されると共に大きな期待が懸られる。(写真は団体対抗決勝戦で本学三浦、同大安井を横四方固めで破る一瞬)



◎野球部 リーグ最終戦傳統の関々戦

は綱の連投よく関学を破り、伏敵神大に敗れ優勝を逃したとは云え、有終の美を飾つた。

五月二日	本学5—4同大	勝	西宮
五月三日	〃 0—1同大	敗	〃
五月十三日	〃 0—5立命	敗	衣笠
五月十六日	〃 7—2同大	勝	西宮
五月十九日	〃 5—3神大	勝	〃
五月廿一日	〃 2—4	敗	〃
五月廿三日	〃 3—2関学	勝	〃
五月廿四日	〃 1—2	敗	〃
五月廿五日	〃 7—0	勝	〃

殆ど連日マウンドを踏み健闘した綱の努力は賞讃されて良い、投手力の充実する秋季リーグを期待したい。

◎軟式庭球部 本春有望な新人を加えた当部は、シーズン始めより好調、優秀な成績を挙げている。

関西学生B組個人戦	優勝
一位	吉高 菊池
三位	大谷 西原
〃	清家 山根

大阪学生軟式庭球大会優勝

一位	吉高 西原
二位	清家 飯塚
三位	岡積 小川重

◎フエシング部 五月二十五日より開始された春季リーグ戦も本稿締切までには、エッペの二戦を終えた処まで、三種目中、フルーレは本学の優勝に決定

フルーレ 本学18—12同大 勝



(写真はフエシング部)

フルーレ	本学18—12同大	勝
〃	〃 18—10立命	〃
〃	〃 18—8関学	〃
エッペ	〃 18—8立命	〃
〃	〃 9—17同大	敗
◎排球部	前号記載通り期待に背かず好成績を挙げた当部は、京大、立命、と三校同率の勝点を挙げ、六月十九日三校間に優勝決定戦が行われる筈である。	
五月二十五日本学	2—1立命	京大
〃	〃 0—2京大	〃
六月一日	〃 2—0京工芸	関大
〃	〃 2—0大市大	〃
〃	〃 2—1和歌大	〃

◎卓球部 六月七日八日 同大体育館に於いて春季リーグ戦が開催され、関学大に一敗して優勝を逃した。

本学4—2同大	勝
〃 4—3立命	〃
〃 4—0大市大	〃
〃 4—0近大	〃
〃 1—4関学	敗

大阪学生個人選手権には、一位山根、二位飯田、三位西田、ダブルス 一位山根飯田、二位西田、広田と、いづれも本学が優勝した。

◎籠球部 五月九日対慶応定期戦に上京、五月十日、十一日対戦、連敗したが、翌十二日早大戦には熱戦の末引分けた。

本学	62—69	慶応	敗
〃	52—73	〃	敗
〃	57—57	早大	分

六月十三日より十六日まで神戸王子体育館で挙行的西日本総合大会に出場、六月二十六日より五日間西宮体育館に於ける西日本学生籠球大会に出場する。

◎庭球部 六月二十一、二日の両日名古屋市で行われる東西学生対抗に本学より、澁川、辰馬の両君が西軍メンバーに加えられる出場する、六月五日より甲子園コートで行われた関西学生新人戦に本学はダブルス、シングルの両方に優勝した。

(三頁へ)

徒然草と民法

明 石 三 郎

徒然草には第九十三段に「牛を賣る者あり。買ふ人、明日その價をやりて、牛をとらんといふ。夜の間に牛死にぬ。買はんとする人に利有り、賣らんとする人に損あり。」と語る人有り。云々と書かれてゐる。この損益の理屈は我々の取引上の常識から云えば全く当然のことを言つてゐるように思える。ところがこれが我が民法では危険負担の問題として議論されるところなのである。

右の文章は法律關係を決定するのには些かあいまいであるが、恐らくこう云う意味であろう。この牛を幾らの代價で賣らう買わうとの約束は出来たが、ただ代價と牛とは明日交換的に取引することになつてゐた。ところがその夜の内に牛が死んだのである。その原因は賣主の故意や過失によるものでも、況や買主のそれによるものでもなかつたであらう。この場合に賣主は死んだ牛をそのまゝ自分の物として適当に処分し、買主は約束の代金も支拂わず、前日の約束は凡

て解け合ひにしてケリがつけられる。一日の違いで賣主は大いに損をし、買主は損を免れたと云うわけである。尤も、兼好はすぐ後で賣主も損はして居らないといふ。それは無常の人生のことだから、賣主自身が死んだと思えば、牛の死位は万金を得て一銭を失つたにすぎないではないか、というのである。然しそれは兼好一流の仮定を置いての話であるから、ここでは問題にしないでおこう。

兎も角賣主と買主とのこのような解決方法は至極我々の常識に叶つたものである。この問題を我々が如何に取扱つてゐたかに付ては、法制史家が触れていないようであるが、恐らく徒然草と同じ解決に従つてゐたと想像される。時代は下るが、去來の落柿舎記にも、去來が庵廬の四十本の柿の実を木に生つてゐるままに賣る約束をして、代金も得ていたが、一夜のうちに風で柿の実が落ちて了つたので去來は受取つた金を返して賣買を解け合ひにした。これが落柿舎の名称の起

源であることが見えてゐる。

ところが現在の我國の民法ではこれとは反対の解決を強いるのである。即ち賣主は死んだ牛をそのまま引渡し、買主は約束通りの代價(健全な牛としての代價)を拂うべきだといふのである。即ち「この牛」と云うように特定の物の賣買にあつては、その契約の成立した以上、その後目的物が不可抗力によつて滅失したり、毀損したときには對價の危険は債權者(買主)が負う(民法五三四條)。なぜこうするのであるか。本來これに付ては國によつてやり方が違つており、ドイツでは目的物の引渡を終るまでは常に債權者(買主)が危険を負う(徒然草と同じ)。イギリスでは牛などの動産の場合は所有權を持つてゐる者が危険を負う。即ち目的物を引渡したかどうかに関係なく、所有權を移轉したかどうかによつて決める。フランスは場合を分けて、特定の物の賣買などであれば債權者(買主)が危険を負い、その他の場合は凡て債務者(賣主)が負うといふのである。日本の民法はフランス民法に倣つてゐる。従つて我國でも数頭の牛のうち一頭を買つたと云う場合だつたとしたら矢張り買主は代金を拂う必要はないのであるが、特定のこの牛をとなつてゐたのなら代金の支拂義務がある。このような方法を探つた理由に付ては「危険は買主に在

いり」と云うローマ法の考え方が現れてゐるのだと云い、また賣買の契約が成立すれば同時に所有權は買主に移るのだから所有者が危険を負ふことにしているのだと云い、或いは契約が成立した以上は、目的物を引渡すまでにその時價が騰ればそれだけ買主の儲けとなるのだから「利の歸するところ損失もまた歸する」とするのが衡平であるからだ、などと色々の理由付けが試みられては居るが、何れも我々を充分納得させるものを見出せない。商取引は暫らく別としても我々の日常取引では一律に債務者(賣主)に危険を負わせるか、ドイツのように引渡の有無によつて決定するのが理論的にも實際的にも正しいであらう。思うに賣買のような双務契約では物の引渡と代價の支拂という二つの債務が對立し且つ関連し合つて成立しているのであるから、一方の債務が不可抗力によつて實現できなくなれば、他方の債務もこれに応じて無くなるのが道理に合うように思える。然しそれにしても現に我々の上に實施されてゐる民法では右のようになつてゐるのであるから、實際取引に當つては何時も注意しておかなければ、特に買主としては思わぬ損害を受けるおそれがある。もし徒然草や落柿舎のような解決を望むものは賣買契約を締結する際に一札入れて、そのことを契約書に書いておく必要があ

る。私は昨年通勤の便宜上、以前の家を賣つて現在の家を買つたのであるが、買つ場合にこのことが氣になつてゐた。通常は賣買契約書の交換があつてから家の明渡までには長ければ数ヶ月の場合もあるが、少くも一日位は期間がある。従つて夜のうちに「家焼けぬ」とか、「家流れぬ」とか云う突発事故が起らぬとは、兼好でなくとも何人も保障の限りではない。その場合に数十万円の代金は拂つていても返して貰えず、しかも目的の家は消えぬとあつては我々階級は自殺もし兼ねないことであらう。私の場合では周旋人が契約書類一式を代書人に作成して貰ひ、ただ本人の署名捺印さえあれば契約が成立するまでに準備して來るとのことであつたので、どんな契約書が來るか心配と興味とを持つて待つていたが、私の心配は杞憂であつた。矢張り民法の逆を行く特約の文言がちやんと契約書に印刷されていたからである。曰く一、目的物件引渡前に物件焼、滅失した場合は買主何等責任なく契約解除する。と。文章は些かおかしいが、これで大体危険負担が債務者即ち賣主に在ることになる。ただ地震その他で毀損した場合はどうか。民法によれば矢張り買主に危険が負わされる。そこで右の契約書に滅失「または毀損」した場合はと附加したことがあつた。

(法學部教授)



神戸支部總會

(五頁より)
轉事項に就いて説明があつた。續いて懇談に移り、最近世上騒然としてゐる大学對警察の對立問題、神戸支部の發展策等隔意なき意見が活潑に交はされて一応日程を終了。宴會に移り若き日の学生時代の思い出に耽りユーモアを交えた自己紹介等あつて名残を惜しみつゝ學歌齊唱盛會裡に午後七時散會した。当日出席者次の通り。

大寺岡 岡野學長、安井校友課長
支部員 角田好太郎、山崎敬義、星野正身、向井啓、栗坂誠、中藤幸太郎、岩本信正、西田健中村友一、赤井定雄、大塚俊勝、細井三郎、山本泰治、徳永武、宮野省一、多賀恒一、杉村守清、難波泰雄、渡邊道男、片山菊治郎、橋本太一、森又雄、白石和生、貴谷嘉作、島村若之助

昭 六 會

吉田正幸、森知己、難波方、黒田那彦、來開孝、亀井一男、花本巖、田中誠樹、久保正信、福地壽三

五月二十四日(土)午後六時より日本橋島菊に於て昭六會を開催、最近榮轉又は職務移動のあつた西口権四郎、三谷久男、岡部俊吾、川西武治、福原菊治郎、吉橋鐸美、吉本貞美の七氏より抱負談があり、會員の自己紹介並びに近況報告の後祝賀の宴に入る。宴會となるにつれてテーブルスピーチ活氣を呈し、隠し芸十八番の披露など一日抱腹絶倒した。学生時代の懷旧談に話が湧き新緑の五月宵に陶然とした。閉會に當り學歌齊唱盛會裡に散會した。当日の出席者次の通り。

足立善道、明倉茂雄、上野俊彦、奥川武郎、岡部俊吾、西口權四郎、○藤原善三、今井慧天、○門田文三、橋井文雄、三谷久男、野野井、田中俊(○)福田、川西武治、佐伯三郎、松本英男、三橋義則、藤井義興、中辻俊、○右賀司郎、久井忠雄、堀畑研一、山野淳一、福原菊治郎、○青川敬一、夏多由造、中村武一郎、吉橋鐸美(註○印は新任された幹事)

日本公証人連合會役員に就任

五月四日開催された日本公証人連合會總會に於いて左の三氏が選任された。

副会長 下條小野右衛門氏

(大三、専法卒)

監事 山崎敬義氏(大、四、大法文卒)

同 長本元男氏(明三九、専法卒)

(十一頁より)

六月十日 ダブルス決勝

後藤 (本) 7-5 泉谷
谷井 (学) 6-8 (大) 神
6-4 加藤
シングル決勝

後藤(本学) 6-12 (関学) 納家

◎相撲部 六月一日藤井寺に於いて西日本相撲大会が開催されたが、本学は準決勝に同大に敗れ、三位決定戦にも関学大に敗れ四位であつた。

◎二部辯論部 毎年五月三日憲法施行記念日に舉行せられる当部主催の大阪府知事杯争奪全関西高等学校優勝弁論大会は、本年も北市民館に於いて、大阪府、市教育委員会、毎日、新大阪新聞、新日本放送各社後援の下に開催、年々参加校の増加を見、盛會を極め、本年は五十校余の多数の参加があり、当日、大会々長岡野學長の挨拶、赤間府知事の祝辭の後、舌戰を展開、午前九時より午後七時まで十時間におよぶ長時間、去りやらぬ聴衆三百余名。審査結果、相愛高校伊達高子さん、論題「群集心理」が優勝者として、知事杯、知事賞等が贈られた。

訂 正

前号表紙写真説明文中アン・ヒ・イシエタ1とあるはアン・フィシエターの誤り、編集子の不注意お詫びして訂正致します。

SCAP: CIE より寄贈のアメリカ文学書

(前号続き)

- Kazin, Alfred: On native grounds; an interpretation of modern American prose literature. Reybal & Hitchcock, 1942. 541p.
- Lewis, Sinclair: Arrowsmith. (Modern library) 464p.
- Lombard, Nellie Mae: Looking at life through American literature. Srtanford Univ. Press. 1948. 91p.
- Marquand, John P.: The late George Apley; a novel in the form of a memoir. (Modern library) 354p.
- Matthiessen, F. O.: American renaissance; art and expression in the age of Emerson and Whitman. Oxford Univ. Press, 1949 678p.
- Mayberry, George(ed.): A little treasury of American prose. (Little treasury series) 954p.
- Nevins, Allan, and Commager, Henry Steele: A short history of the United States. (Modern library) 528p.
- O' Neill, Eugene: Nine plays. (Modern library giant) 867p.
- Porter, Katherine Anne: Flowering Judas, and other storeis. (Modern library) 285p.
- Spiller, Robert E., and others (ed.): Literary history of the United States. 3 vols. Macmillan 1949.
- Steinbeck, John: The Portable Steinbeck. (Viking portable library,) 609p.
- Twain, Mark: The portable Mark Twain. (Viking portable library) 786p.
- Two way street; internatonal educational and technical exchange in fiscal year 1950. U.S. Govt. Print. Off., 1950. 119p.
- Van Doren, Carl: The portedle Carl van Doren. (Viking potable library) 628d.
- Wharton, Edith: The age of innocence. (Modern library) 365p.
- Williams, Oscar (ed.): A little treasury of American poetry. (Little treasury series) 860p
- Wolfe, Thomas: The portable Thomas Wolfe. Vikng Press, 1948. 712p.
- The World almanac and book of facts for 1951. New York World-Telegram, 1951. 912p.

【編集後記】

◇他に例の少ないアンフィシエターも完成し、大学院研究室を中心とする白壁の殿堂は千里山の一角にその威容を誇っています。大学拡充建設は着々と進み植の音は高く周囲の丘にこだまして、われわれの夢の実現も遠いことではあります。

◇各地で校友支部会の開催、校友各位の御発展を心より御慶び申し上げます。こうした催物等の際はお手数致れその記事を学報局にも預きたいものです。毎月の記事は鮮度を尊びます。会後の御一報をお忘れなく。

◇季候不順の折柄、各位の御自愛を祈ります。

昭和二十七年六月十五日印刷
昭和二十七年六月十五日発行
一年誌代費三〇〇円(送料共)
関西大学学報 第二四九號
大阪市長堤区長柄中通二丁目二番地
発行所 松生和夫
大阪市長堤区長柄中通二丁目二番地
印刷所 西井幾藏
大阪市長堤区長柄中通二丁目二番地
印刷所 株式会社ナニワ印刷所
大阪市長堤区長柄中通二丁目二番地
発行所 関西大学学報局
大阪市長堤区長柄中通二丁目二番地
電話 堀川(五)一七五六番
振替 大阪二六七七二番

會 習 講 定 認 法 許 免 員 職 育 教

本大学は一般現職教員に対し、上級教育職員免許状（中学校一級、高等学校二級）を受けるに必要な教職科目、教科科目及び一般教育科目の単位を修得せしめる目的のため、左記要項により夏期免許法認定講習会を開設する。

記

【會場及び期間】

會 場 大阪市淀川区長柄中通二の十二 関西大学 天六学舎

期 間 自昭和二十七年七月十四日
至昭和二十七年八月二十二日

講義時間は午後四時より同九時まで

【科目単位及び講師】

教職 專門 科目	教育原理 (四単位)	関西大学助教授	鈴木 祥藏
	教育心理学 (四単位)	"	川口 勇
教職 專門 科目	教科教育法 (四単位)	関西大学専任講師	寛田 知義
	教育行政史 (二単位)	大阪市大講師	蜂屋 慶
教科 專門 科目	日本史概説 (二単位)	関西大学 教授	横田 健一
	西洋史概説 (二単位)	"	安藤 俊雄
教科 專門 科目	人文地理概説 (二単位)	関西大学 講師	山口 平四郎
	哲学概説 (二単位)	関西大学 教授	大小島 眞二
一般教養科目 日本国憲法 (二単位)		"	中谷 敬寿

◎受講願書受付は六月下旬より 詳細は天六学舎教務課、吹田市千里山関西大学法文事務課又は経商事務課に問合の事